

鴨川の中州について

7月13日～15日の梅雨前線豪雨について

■ 今回の豪雨の概要(鴨川周辺の状況)

○総雨量：323mm（上賀茂雨量計、12日 22:00～16日 4:00）

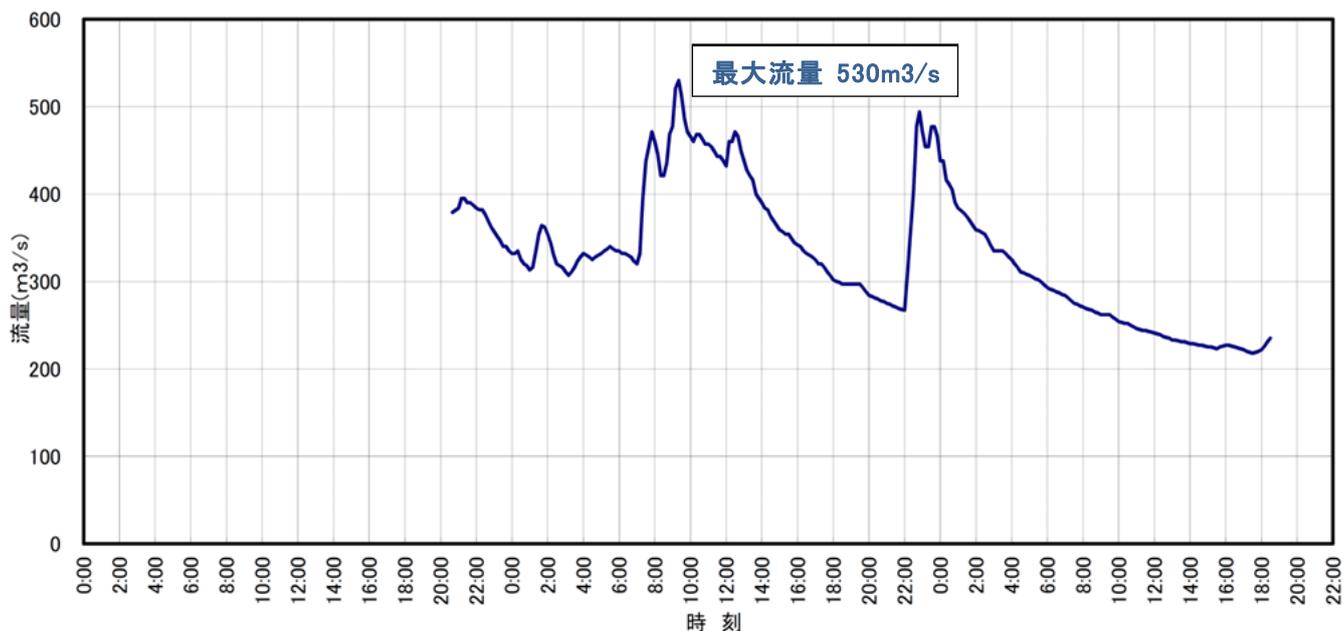
○時間雨量：44mm（上賀茂雨量計、13日 19:00～13日 20:00）

○水位：2.08m（荒神橋水位計、14日 9:20）
（平時 約 0.4m）

○出水の影響：二条大橋～五条大橋の高水敷が通行止
ホームレスの小屋 8箇所が流出、数箇所が浸水

今回の豪雨による洪水は、約 530m³/sでした。

鴨川出水 2010年7月13～15日



7月13日～15日の梅雨前線豪雨について



北大路橋下流

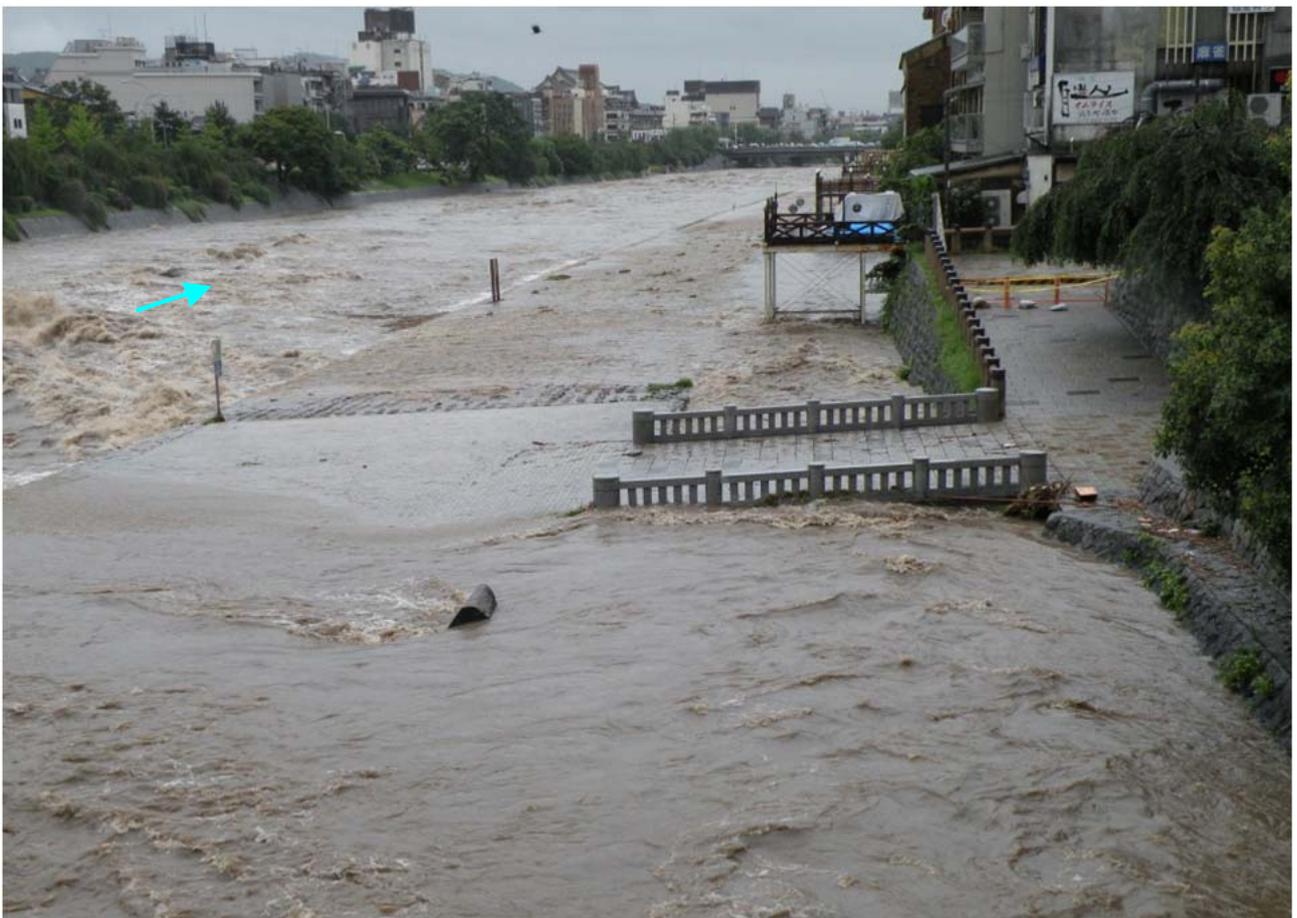


勸進橋下流

7月13日～15日の梅雨前線豪雨について



四条大橋上流右岸



三条大橋下流右岸

7月13日～15日の梅雨前線豪雨について

(出水後のようす)



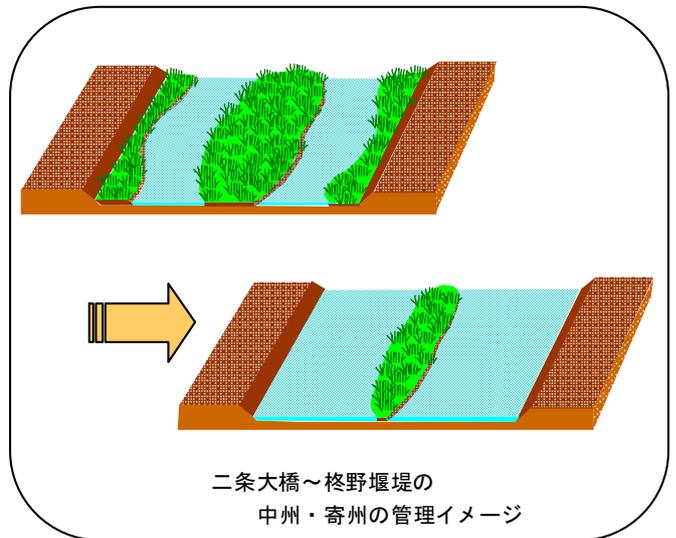
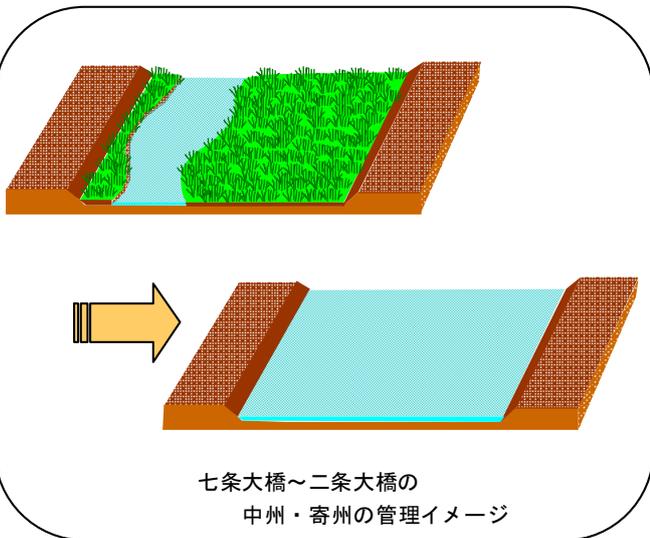
中州の整備方針

○ 中州・寄州の管理に係る各区間の現状

区間	距離標	河床変動	治水・土砂管理上の課題	備考
桂川合流点 ～七条大橋	0～7.6km	河床は低下傾向	河床掘削による河積の拡大を図る区間	
七条大橋 ～二条大橋	7.6～10.4km	河床は低下傾向	目標規模の洪水に対して余裕が全くないことから、河積を減らさない日常的な管理が必要	
二条大橋 ～柘野堰堤	10.4～17.9km	河床は上昇傾向	流下能力はあるが、自然の攪乱がなく、乾陸化が進行している。激変緩和のための定期的な土砂管理が必要	

○ 中州・寄州管理の方針

区間	管理の実施方法	備考
桂川合流点 ～七条大橋	<ul style="list-style-type: none"> ● 今後河床掘削を下流から順次実施 ● 維持管理は行わない（環境対策区間は引き続き河床整正を実施） 	
七条大橋 ～二条大橋	<ul style="list-style-type: none"> ● 河積を確保するため、土砂堆積が認められ次第、随時河床整正を実施 	
二条大橋 ～柘野堰堤	<ul style="list-style-type: none"> ● 20年程度でほぼ全面が乾陸化する状況であることから、概ね10年程度のサイクルで河床整正を実施する ● 各橋梁間(14橋梁)を1年に2橋梁間程度ずつ、環境に影響の少ない3月or9月に河床整正を実施 ● 整正の方法等詳細については、環境へも配慮しつつ府民会議等の意見も踏まえ、当面は試行錯誤を重ねながら決めていくものとする <p>※ 高野川(鴨川合流点から三宅橋までの区間)についても、同様の中州管理を行うものとする。(10橋梁)</p>	上流ほど水量が少なく、全面均一に整正を行うと水深が浅くなりすぎることや区間毎に条件も異なることなどから整正の範囲や形状等詳細については、色々なやり方を試し、効果や環境等への影響も確かめながら改善を図っていくことが望ましい。



出水前後の比較(中州管理を実施した箇所 1/2)

①鴨川 御菌橋上流



出水前後の比較(中州管理を実施した箇所 2/2)

②高野川 河合橋上流



出水前後の比較(中州管理を実施していない箇所 1/2)

③鴨川 葵橋上流



出水前後の比較(中州管理を実施していない箇所 2/2)

④鴨川 二条大橋上流



鴨川等の中州管理について

■ 環境調査の実施

(1) 調査地区

河川名	地区名	管理年度	区間No.
鴨川	四条大橋～二条大橋	H21	①
	賀茂大橋～葵橋（河合橋）	H21	②
	御園橋～西賀茂橋	H21	③
高野川	高野橋～松ヶ崎人道橋	H21	④

(2) 現地調査

項目		調査方法
底生動物	定量調査	瀬の部分の3箇所、一定範囲（25cm角）内の底生動物を採取
	定性調査	淵や水際で、採取
ゲンジボタル	幼虫調査	区間内で幼虫を採取、個体数の計測。
植物	植生	区間内を踏査し、相観植生を確認
	植物相	区間内を踏査し、確認種を記録

※ゲンジボタルについては、生息が確認されている区間において、個別の幼虫採取調査を行う。

(3) 調査時期

項目	調査内容	調査時期			調査区間No.			
		5月	9月	12月	事前・事後調査			
					①	②	③	④
底生動物	定量調査	—●	○●		—●	○●	○●	○●
	定性調査	—●	○●		—●	○●	○●	○●
ゲンジボタル	幼虫調査		○—	(●)				○(●)
植生	相観植生調査		○●		○●	○●	○●	○●
植物相	植物相調査		○●		○●	○●	○●	○●

※ ○：事前調査、●：事後調査、()は12月実施予定

■ 調査の結果

(1) 植物関係

- 全体的に確認種数が事前・事後で約2倍に増加（99種→191種）
 - ▶中州管理後の裸地に一年草が多数侵入・定着したためと分析している
- 区間②でカワチシャが事前に確認されたが、事後は確認できなかった。
 - ▶自然状態でも生育箇所は年により変化するため、因果関係不明
- 外来種の割合に変化なし
 - ▶今後も継続して確認する予定
- アレチウリは事前・事後で生育場所が大きく減少、オオフサモは事前に確認されたが、事後には未確認、オオカワチシャは事前・事後で生育場所が拡大
 - ▶今後も継続して確認する予定

(2) 底生動物

- ユスリカ類（ハエ目）が事前・事後で90%以上減少
 - ▶硬化した中州を一部除却するなど手を加えたため、生息場所の砂や泥など堆積物が流されたためと分析している

